

病気テーマに劇 ふれ合い生きがい療法

「胸が締めつけられる。二口をぐねっ」。胸を押さえないから、うめくように妻に頼む元大学教授。「大丈夫？ 看護婦さん、ちょっと見て下さい」と妻。症状はひどく、看護婦が声をあげる。「救急車を呼んで下さい。私は先生に連絡しますから」

熱演が続く劇団「松ぼっくり」の舞台。心臓発作の起きた元教授を演じるのは十一年前、心筋コウソクで倒れた土屋伊興さん(モ)、妻役は、心臓弁膜症のため十年前から人工心臓弁をつ



9

変わる病院の役割

二月、結成した。きつかけは「病気や治療法、リハビリなどについて理解を深めてもらうには、病気をテーマにした劇を患者に演じてもらうのが効果的」との松尾美由紀院長(西巴)の呼びかけだった。

脳コウソクで半身不随だったり、大動脈閉鎖不全症で死線をさまよったりした患者らが参加。脚本は、松尾院長の知り合いの放送作家に頼み、できあがった第一作は「桜屋敷」。お屋敷に住む夫婦と近所の人たちとの触れ合いを描いており

毎週土曜、待合室で練習を重ねた。旗揚げ公演は今年七月十六日、八尾市文化センター

昭和三十年に開院した同クリニックには、通院患者ら約二百五十人をつくる「松樹会」があり心臓病、高血圧症についての健康教室のほか、七宝焼、書道、手芸を楽しむ文化教室で患者同士や医師、看護婦との交流を図っている。「病気と上手に付き合い、積極的に生きる気概を持ってもらう」。劇団は、松尾院長の触れ合い、生きがい療法をさらにすすめるもので、十二月の第二回公演を目指して今月末から練習が始まる。

病院の役割が変わりつつある。対症療法的な治療にとどまらず、心のケアも求められている。それは患者をはじめ、地域の人たちも含めた、幅広い「健康センター」的な存在への期待の高まりである。

地域住民への医療サービスのための「友の会」で、健康セミナーの開催や機関紙の発行、健康相談のほか、野菜即売会、ゲームなどもある健康まつりの実施など府内の病院でも様々な試みが生まれている。



「松ぼっくり」は八尾市東本町の病院「松尾クリニック」に通う患者が昨年十月代さん(六六)。

旗揚げ公演で熱演する劇団「松ぼっくり」のメンバー(7月、八尾市文化センターで)